

第 4 2 期会員総会開催

山崎記念農業賞は栃木県益子町「(株)川田農園 代表川田修氏」に

7月23日、NTC コンサルタンツ株式会社会議室(東京中野区中野坂上ハーモニータワー20F)にて、第42期会員総会が開催されました。最初に会員総会(13:00~13:40)を行い、2015年度の活動経過報告と会計報告、2016年度の活動計画及び2016年度予算案について審議し、満場一致で承認されました。

総会に続いて山崎記念農業賞の授与式(13:40~14:20)が行われました。今年の農業賞は“(株)川田農園 代表川田修氏”(栃木県益子町)に授与されました。授賞式では、川田農園の取引先の一つである京王プラザホテルの和食総料理長加藤敏之から“お祝いの言葉”をいただき、引き続いて川田さんから就農のいきさつ、農園の経営内容などについて、質疑応答を交えてお話しいただきました。

授賞式式典の後は、“「こだわり」で結び合う農と食—農園と厨房をつなぐ川田農園の挑戦—”と題して、記念フォーラムを開催しました。最初に小泉所長から「フォーラム改題」として川田農園の概要について報告があり、元日本土壌協会専門委員の家常高さんから「我が国における有機農業の動向」について、今回の農業賞推薦者である栃木6次産業化サポートセンター実践アドバイザーの小林俊夫さんから「栃木県の6次産業化振興と川田農園の特徴」についてお話しいただき、その後活発な自由討論を行いました。

懇親会は、川田農園取引先の京王プラザホテル・レストラン「樹林」で、川田農園産の野菜をふんだんに使った料理をいただきながら、交流を深めました。



受賞者 川田夫妻



お祝いの言葉

京王プラザ和食総料理長加藤敏之氏



懇親会；京王プラザ・レストラン樹林



川田農園の野菜を使ったメニュー

川田農園の特徴

川田さんは、現在 44 歳で、農業の経験は全くなかったのですが、娘さんのアトピー性皮膚炎での悩みを解決するために、農薬を使わない安全・安心の野菜作りをしようとして、2005 年に川田農園を開園しました。就農当初は、作り方がわからない、どのように販売したらわからない、資金が無いなど、無い々づくしでしたが、それが逆に幸いし、農業以外の多彩な支援者を得ることができ、既成の概念にとらわれない農法、販路の拡大につながりました。

経営規模は、現在 11ha の畑（ハウスは 1ha）で、完全無農薬の農業を行っています。肥料も土壌菌と鶏糞などの有機資材や天然資材を使用しています。無農薬なので、どうしても病虫害の発生は避けられませんが、多品種栽培による病虫害の拡散抑止や、雑草と作物の生存競争力に着目し、作物が雑草に勝るような状態まで育ったら、それ以上の除草は行わないというような工夫をしています。肥料はサンゴ、牡蠣殻の他、EM 菌をはじめとする様々な土壌菌、発酵鶏糞などの発酵資材を使用しています。これらの組み合わせは試行錯誤的に確立してきたものだそうです。栽培作物は、葉物と根菜類を中心に約 80 種類の野菜で、高冷地の遊休農地（標高 1000m、戦後開拓地、借地、片道 30km）でレタス等の夏野菜を栽培、作期拡大・周年出荷の方向を目指しています。農園の従業員は、常勤は男性 5 人（ベトナム研修生 22 歳、長男 23 歳、元整備士 33 歳、奥さんの父親 65 歳、近在 68 歳）と女性 4 人、それに非常勤（女性）5 人である。土曜日は全員休日で、日曜日は交代制をとっているそうです。

川田さんがいちばん重視するのは鮮度と顧客との信頼関係です。そのため、川田さんご自身が直接顧客（レストラン等）に配送するシステムをとっています。現在取引している店舗は都内 130 を数え、個人ネット販売は 15 所帯と取引があり、宇都宮市内の 2 か所の直売所にも出しており、地産地消への関心も高い。東京へ配送は、週 2 回で、1 日の走行距離は 400km にもなるそうです。

レストランに直接手渡すということは、レストランの厨房と川田さんの畑が直結しているということでもあります。「今の流通にのっかってしまうと鮮度が保てない」という川田さんの言葉は、「今の流通を前提にすると、自分の理想とする野菜づくりができないし、ベストの状態野菜を届けることもできない」と言い換えられるのではないのでしょうか。このような思いから、鮮度を届けるために自ら販路を開拓し、農場と厨房を直結した「顔の見える関係」の構築に成功しています。さらに、川田農園の特徴として、既成の学問や制度、慣行的な農法にとらわれない、自らの工夫と努力によって導き出された、その土地に適した営農栽培方法の確立があげられます。また、農園の経営を通じて、遊休農地の活用、地元雇用の創出、若手農業者の育成を通じて地域社会の創造を展望するなど、現場とともに歩む川田農園の姿からは教えられるものは多いと感じました。



川田農園



配送トラック

川田農園直営レストラン Kizuna

川田農園直営レストラン Kizuna は、安全で美味しい野菜を地域の人に食してもらいたいという一念で2014年に開店しました。娘さん（26歳）が仕切っています。とちぎの地産地消推進店に指定されています。場所はJR宇都宮駅から車で5分程度の、あまり目立たない場所にありますが、場所代を考えると駅直近での開店には無理があるということと、本当に美味しい料理なら客がつくはずだという信念で今の場所にしたそうです。現地視察当日（6月9日木曜日）はほぼ満席（予約制）で、客層の大半は子育て中の若いお母さんたちやOL風の女性でした。数人の客に尋ねたところ、インターネットのHPで知ったという人が多く、遠くは1時間もかけて車で来たというグループもありました。来店動機は、やはり完全無農薬の安全な野菜という点と、小さな子供連れでも入れる店（小さな子供が寝られる食事コーナーが設けられている）ということがあるようです。野菜はビュッフェ方式の食べ放題です。

弁当の宅配も行っています。その宣伝コピーには、川田農場の野菜は、「農薬を一切使わず、有機肥料だけで野菜の生命力を引き出した“魂の野菜、」であり、そこには「一つ一つ手間をかけ、畑で味付けする”野菜職人、技」があり、「何も付けずにまず一口“野菜本来の味、を」と呼びかけています。一般弁当 850円～1,000円、月極め 500円である。会議や催しもの用の特選弁当（500～3,000円）もあります。



川田農園直営レストラン・Kizuna

福島第一原発・帰還困難区域を訪ねて

帰還困難地域の浪江町、双葉町や東京電力福島第一原発を視察してきました（7月20日）。福島駅前から車で川俣町、大垣ダムを抜ける国道114号線を通り、途中TV番組ダッシュ村が置かれていた地区（浪江町山間部）を経て、浪江インターから常磐高速道を通ってJヴィレッジに入り、そこから東電のマイクロバスに乗り換えて福島第一原発の敷地内に向かうという行程です。

福島市内から川俣町の平地部の放射線量はだいぶ落ち着いてきており（ $0.05\sim 0.10\mu\text{Sv/hr}$ ）、営農も再開されていていつもの農村風景という感じですが、川俣町も山間部に入り山木屋地区あたりに来ると急に線量が上昇し（ $0.5\mu\text{Sv/hr}$ 以上）、農業も再開されていません。多くの民家も人は住んでいません。いたるところにフレコン（除染した土などの梱包）が農地や空き地に山積され、まだ除染中の農地も多くみられます。このあたりから許可車両しか入ることが出来ません。山越え中はどんどん放射線量が高くなり、場所によっては $5\mu\text{Sv/hr}$ を示すところもあります。太平洋側の浪江町の市街地に入ると放射線量はかなり低下しますので、山間部の放射線量の高さが際立っています。山林の除染対策がほとんどなされていないので、せっかく平場で除染を進めても、山間部から新たな放射能物質が補給されてくるのではないかと心配されます。双葉町、大熊町などの帰宅困難区域は当然人も住んでいませんし、農業再

開もできませんから、農地は完全に耕作放棄状態で、かろうじてここが農地だったとわかるような痕跡が見られる程度です。

発電所の入構審査は当然厳しく、カメラなどの撮影機能を持った機器類の持ち込みは禁止なので、構内は東電社員が代わりに撮影し、後日送ってくれることになっています。放射線量は3年前と比べるとだいぶ低下しており、入溝口付近は $1\mu\text{Sv/hr}$ 以下で、3年前に比

べて1/10以下に低下しています。これは放射性物質の半減期だけでなく構内の除染やアスファルト覆工の効果であると思われます。しかし、原子炉近くまで来ますと $30\mu\text{Sv/hr}$ を超える高線量で、長時間居続けるには危険が高すぎます。今回の視察から時間はあまり経っていないので、まだ整理がついていませんが、後日、何らかの形で報告したいと考えています。



帰還困難区域通行許可審査ゲート

(事務局長；渡邊博)

機関誌「耕」および電子耕の原稿募集

機関「耕」や電子耕をより開かれた広報媒体として活用していただくために、会員から広く投稿を呼びかけています。特集テーマなどは編集部から原稿を依頼していますが、会員の自主的な投稿も大いに歓迎します。内容は、農業や食料、環境問題だけでなく、その時々^の社会的出来事、政治、経済など範囲は問いません。山崎農業研究所の活動趣旨に沿うものであれば内容は問いません。提言、意見、研究発表あるいはエッセイ的なものでも構いません。

機関誌「耕」；文字数 1500～5000 程度

電子耕；文字数 800～1200 程度

投稿方法；特に問いませんが、編集作業の効率上、できれば電子メールで Word などのテキストファイルで投稿していただければありがたいです。なお、写真、図表などを使用される場合（機関紙「耕」のみ）はできるだけ鮮明なファイルを同封してください。

投稿先；E-mail y.masunaga@ntc-c.co.jp

山崎記念農業賞基金の寄付募集

山崎記念農業賞は、会員の皆様からの寄付からなる基金で運営していますが、ここ5年間寄付を募っていなかったこともあり、基金残金が残りが少なくなってきました。山崎記念農業賞の主な支出は、受賞対象者調査費（主に交通費）、受賞者の旅費交通費（2名程度）と表彰楯製作費です。

大変心苦しい限りですが、どうぞ山崎記念農業賞の趣旨をご理解いただき、ご協力をお願いいたします。

会費納入のお願い

山崎農業研究所は、会員の会費や寄付で財政のほとんどを賄っています。会費納入率が昨年度は83%でまだ十分とは言えない状況にあり、研究所の運営に支障をきたす要因となっています。まだ2015年度会費を納められていない会員におかれましては、是非会費納入にご協力くださるようお願いいたします。なお、2016年度会費の払込票は次号の耕（139号）発送時に同封します。

入金先；郵便貯金 山崎農業研究所 口座番号 10130-79304751

みずほ銀行 普通預金 山崎農業研究所 四谷支店 (036) 口座番号 8043304